

拡大ひととき礼拝

平和を実現する人々は、幸いである

(マタイによる福音書5章9節)

ランデス ハル (会員、東京 Y W C A 元総幹事)

9月9日(水)、キリスト教基盤研究室では新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期となっていた「拡大ひととき礼拝」を開催しました。東京 Y W C A の公益財団法人への移行から10年を前に、Y W C A の公益事業や活動におけるキリスト教基盤について理解を深めるためにランデスハルさんにお話を伺いました。

ランデスさんは1981年から総幹事を2期8年間務められ、現在の東京 Y W C A 会館建て替え、テナント事業で会員活動を支えるしくみづくりに奔走されました。当日のお話の要旨をご寄稿いただきました。

マタイによる福音書5章によって山上の説教を学ぶことにしましょう。聖書の中で広く読まれている個所のひとつであり、親しみ深い教えです。ここには神に祝福される多様な人びとの姿が描かれており、キリストの教えの重要な内容を示す一群の聖句でもあります。

私たちは日常の思いや行動において少しでも神の御心に近く、喜んでいただけるものでありたいと願っています。ところが神の望まれるところと、私たちがめざすところには多くの場合大きなズレがあるようです。神に祝福される平和とはなにか？ 追い求め、時代に即して何ができるかを考え、行動することが平和のための貢献になるのでしょうか。

山上の説教はマタイによる福音書の5章にとどまらず、6、7章においても展開されます。5章には「地の塩、世の光」、「誓ってはならない」、「敵を愛しなさい」など、一見処世術のようにさえ聞こえる教えも含まれています。ここでは幸いな人びとについて述べられている5章冒頭の3から10節に注目しましょう。具体的には心の貧しい人びと、悲しむ人びと、柔和な人びと、義に飢え渴く人びと、憐み深い人びと、心の清い人びと、平和を実現する人びと、そして義のために迫害される人びとが幸いな人びととして列挙されています。

これらの人びとはどんな理由で幸いな人びととして選ばれているのでしょうか。ここには私たちの目からは“思いがけない”人びとが挙げられており、その選びの理由は私たちには自明のことではありません。ここでは私たちの日常の視点からは隠されている真の幸いの姿が、イエスの祝福の中で本来の意味を回復しているのです。

ここで述べられている神の祝福を受ける場合について、一番大切に、身近に感じられるのはあなたにとってどんな場合でしょうか。それは人それぞれによって異なることでしょう。私は最も重要な場合として、「平和を実現する人々」について考えてみたいと思います。

5章の9節には「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」とあります。私たちの日常生活の中での平和のための、心細く頼りない営みとはなんと大きくかけ離れた宣言であることか。この大きな隔たりにもかかわらず、私たちのささやかな努力を本来の目標の実現に導いて下さるのが神の祝福に他なりません。平和を実現なさるのは神の御業であって、人間の努力はその御業への参加にすぎないと思われまふ。そう考えることは平和について人間のできることの限界を知ることであっても、私たちに託された責任を放棄することを意味するものではありません。私たちの日々の生活の中での平和のための、ささやかな努力を本来の目標の実現に導いて下さるのは神の祝福に他ならないからです。

東京YWCAにつながる私たちがお互いに励まされ、その活動の源において神の祝福を受け、平和の種をまく活動を続けさせて下さいますように。